

学生のピアノ初心者に対する
指導実践報告とその分析(一)
——児童学科過去10年間の指導記録より——

田 島 孝 一

Summary

A Report and Analyses of Piano-Teaching for Beginner Students in the Department of Child Development Studies based on the Records of the past 10 years

Koichi Tajima

In the College Teacher's course for Early Childhood Education, it is very important, but by no means easy, to make the students learn piano playing which is useful for the actual teaching in the kindergarten. For a student who just matriculates in college as a piano beginner must stand on the platform as a student assistant after 1 or 2 year training. To solve the problem, I have tried a teaching method over the past 10 years, setting the objective as follows: "The Teaching-Method for the beginners to make them progress in a year to the best of their ability."

As a result, there were 4 students who arrived at the Medium grade: the students each played Mozart sonata (k545), Beethoven's sonata (op. 49-2), Chopin waltz (op. 69-2), and Mendelssohn Venetianisches-Gondellied (op. 30-6).

I have continued teaching the course with the following three aims in mind:

1. First, to achieve speedy progress with the beginners in their piano training.
2. As a next step, to encourage the experienced students to advance to upper levels.
3. And to awaken voluntary exercises by student's choice of pieces.

Graphes and diagrams show the results of the efforts.

By these means, the beginner students in our Department have been able to make progress by two or three times as much as before.

This monograph is a report and consideration on the progress observed in the students who have taken the course for the past ten years.

序

保母養成過程を持つ大学あるいは短大において、学生に保育の現場で役立つピアノの習得をさせることは、きわめて重要かつ切実な問題である。1年間あるいは2年間程度のみという短期間の実技指導を受けただけで、早くも在学中に、実習生として保育の場に立たなければならぬからである。現在、一部を除いて、ほとんどの保育者養成機関は入学時にピアノ実技試験は課していないはずであり、そのため、初めてピアノを学ぶ入学者も多数に及んでいるのが現状である（大学によっては6割を超える未経験者を迎える所もある）。

養成機関としては、何としても毎年、幼稚園教諭免許を取得した卒業生を送り出さねばならないのであるが、この現実に対して、「無免許運転に等しい」と指摘する向きもあるようだ。確かにそう指摘されても仕方のない事実が数多くあることも今の実状であり、小学校教員養成機関においてもまた、同じことがいえよう。

しかし今のところ、現状の中で（たとえ初心者マークを付けてでも）できうる最大限の指導努力を行うことしか、この問題を解決に近づける方法はないようである。そこで、本学に於いて、未経験者を1年次の間にどの程度にまで習得させうるか、との目的によって過去10年の間試行を重ねてきた。その結果、昨年第1年次末に4名の受講者がそれぞれ Mozart sonata (k 545) , Beethoven Sonata (OP49-2), Chopin walz (OP69-2) および Mendelssohn のヴェニスの舟歌を弾くに至った。

本論文は、過去10年間に行われた単位試験で演奏された曲目の記録をもととして、その指導の結果報告をおこなうとともに、指導のねらいがどれだけ反映されたかを明らかにすることを通じて、以下の考察を行なうことをその目的とする。なお本研究は'78年度入学者に対する実践を初年度とする。

1. 養成機関で指導しておくべき、保育者として最低限必要と思われるピアノ技量についての考察
2. 未経験者および初級者が、2年間の履修によって進み得たレベルの推移報告。
3. 急激な進歩を見せた未経験者についての報告とその考察。
4. 10年間に見る、全体のレベルの推移報告。

第一章 履修形態および指導のねらい

第二章 初心者および第1年次初心者が演奏した曲のグレードの推移とその考察

第三章 急速な上達を示した初心者の記録

第四章 初心者の上達が及ぼした他の学生への影響

第五章 考察

第一章 履修形態および指導のねらい

第一節 履修形態および入学時のピアノレベル

(1) カリキュラム

本学児童学科に於けるピアノ実技に関する授業内容は、以下の通り。

学科名：音楽理論（講義およびピアノ実技）

授業時間：50分授業・週1時間、年間約20週余りの授業（試験日等を除く）を2年間必修。

授業形態：実技は原則として4名1クラスによる個人レッスン

次に本年度実施した実技試験の内容を示す。

第1年次

7月実施 1) コードネームによる和音奏

2) スケール：C・G・D の各長調および短調を2オクターブ演奏

12月実施 1) 簡単な保育教材へのコードネームによる伴奏付けとひき歌い

2) スケール：A・E の各長調および短調を2オクターブ演奏

1月実施 自由曲の演奏（3分以内）

第2年次

7月実施 1) 8小節のメロディに対するコードネームによる伴奏付け（課題曲より）

2) 任意の保育教材によるひき歌い（任意の5曲より）

12月実施 1) リズム教材（March. Skipp. Galopp. Run）

2) アルペジオ：C・F・G・D・E・A の各長調および短調ならびにDes・

Es・As の各長調およびCis・Fis・Gis の各短調を2オクターブ演奏

1月実施 自由曲の演奏（3分以内）

これ以外に本年度9月には、自由曲による音楽会を実施、1・2年生の全員がピアノ演奏を行った。なお3年次には選択科目として、前期のみピアノ実技を開講している。

第3年次

7月実施 リズム教材（March. Skipp. Galopp. Run）

9月実施 1) 8小節のメロディに対するコードネームによる伴奏付け（初見試奏）

2) 任意の保育教材によるひき歌い（任意の5曲より）

注：第2年次と第3年次の内容が重複しているものは、本年より2年次への繰上げ導入を図ったものである。なお明年度第3年次には、種々の題材による即興演奏として、動きのリズムに対する伴奏付けの導入を計画中である。

(2) 本学入学者のピアノ経験年数

本学入学者は比較的恵まれた環境の中で育った学生が多く、また音楽好きな親を持つ者も少なくない。したがって、大学入学後に初めてピアノの学習を始める者（以下初心者と呼ぶ）は

極めて少ない。次に、受講者の経験年数がすべて判明している'84～'87年度入学生と'79年および受講者のうち82%が判明している'77年度入学生の、入学時点におけるピアノ経験年数を示す。(表1)

(以下本論文中のパーセンテージは、四捨五入による数字のため、必ずしも合計が100%になるとはかぎらない)

表1

経験年数	77年度	79年度	84年度	85年度	86年度	87年度
0年	1名 3%	5名 9%	3名 6%	7名 13%	3名 7%	4名 8%
3年	4名 13%	4名 7%	7名 13%	10名 19%	2名 5%	6名 12%
4～6年	8名 25%	12名 22%	18名 34%	15名 28%	10名 23%	5名 10%
7～9年	11名 34%	11名 20%	10名 19%	10名 19%	21名 49%	10名 20%
10～12年	5名 16%	15名 27%	12名 23%	7名 13%	6名 14%	20名 41%
13～15年	3名 9%	8名 15%	3名 6%	5名 9%	1名 2%	4名 8%
受講者計	32名 *	55名	53名	54名	43名	49名

(*不明の者7名・12%を除く)

以上のように、未経験者はごくわずかであり、また、4年～12年間もピアノ学習をしている者が大部分を占めている。特に13年を越えるということは、すなわち幼児期から大学入学の頃に至るまでピアノ学習を継続している(3才から始めていれば15年)ということになる。

本論文の目的の一つである、大学入学後の一年間にどれだけピアノレベルが向上したかを明らかにするためには、各年度の入学時点における学生のピアノレベルを明らかにしておかねばならない。さて、その入学時点における学生のピアノレベルであるが、一応入学時のアンケートにより調査はしているものの、本人の記憶が定かでない場合も多く、これを客観的に判断するのはきわめて困難である。そこで、本年度入学者に対して9月に実験的に実施した、自由曲による音楽会の曲目を以て、本年度におけるそれぞれのレベルを推量することにした。

以下本論文中に示すグレードの判定は、それぞれ演奏されるtempoによって厳密に規定できるものではないが、一応長岡敏夫著『ピアノの学習』の分類を基準として従ったものである。さらにその中に見出せなかった曲目については、全音ピアノピースの分類に準じたものである。しかし同一人の基準による段階設定ではないので、多くの曲目について段階の相違が双方の間に生じる事があったが、その場合、Klausu Wolters『Handbuch der klavierliteratur zu zwei Händen』を参照して、出来るだけグレードの客観性を図るようにした。なお、両著書の中で[中3—中4]あるいは[St. 3—4]のように表示されているものについては、なるべく数値の低い方を採用する事にした。また、全音ピアノピースの分類の中でA=初級、B=初級上、C=中級、D=中級上、と表示されているものについては、双方に記載されている曲目を比較対照してみたところ、次の様な幅広い相違があった。A=初級2—4、B=初級4—中級4、C=中級3—5、D=中級3—上級2、初級曲の判別についてはほとんど問題はないが、中級曲の判別については、中級3以上の場合B—Cに亘っているため、きわめて困難である。その場合は、前出のWoltersの数値を参考し、そこにも見出せなかった時には、やむをえず私見によるグレードを示すことにした。なお、別表に見る2および曲目表(別表2)に見られる初級4のように

下線を入れたものは私見による判別である。

また、Burgmüller 25番練習曲については、長岡によれば初級 2—4、Wolters によれば Stufe (3) 4—5 となっているが、試験曲として演奏されたものについてのみ、私見により以下の通りの段階区分を行なった。

初級 1 = No. 1, 3 初級 2 = No. 2, 8, 9 初級 3 = No. 12, 14, 15, 20, 21, 22

初級 4 = No. 25

'87年度入学者による第一年次音楽会曲目 ('87年9月実施) のグレード分類

初級 : step 3 = 2名, 4 = 4名, 5 = 2名, A = 1名, その他の初級 = 2名 11名

中級 : step 1 = 3名, 2 = 6名, 3 = 8名, 4 = 9名, C = 1名 27名

上級 : step 1 = 3名, 2 = 3名, 3 = 1名 7名

(初心者4名を除く) 計45名

つぎに、前記本年入学者のピアノ経験年数に応じたグレード分けをこれに準じてあらわしてみる。ただし、初級を6年以内とし、中級を7~12年、13年以上を上級とする。(同じく、初心者4名を除く) (表2-1)

		初級	中級	上級
表2	1 ピアノ経験年数	11名	30名	4名
	2 音楽会のグレード	11名	27名	7名

経験年数が必ずしも習熟度と比例するとは限らないが、両方の数値を比較してみると、ほぼ近似しているといえよう。音楽会のグレードが若干上級への増加を示すのは、次に述べる指導方針による影響の現れではないかと思われる。

第二節 到達目標および指導方針

(1) 保育者として最低限必要なピアノ技量の考察および指導方針

前項で見たように、本学の受講者のレベルは、序において紹介した他大学の標準的な入学者レベルに比べて、きわめて高い水準にあると言えよう。しかし、一部ではあるが、初めてピアノレッスンをうける学生もまた同時に学んでいるのである。これらの学生に対して我々は、切捨てることはもとよりできるはずもない。入試にピアノの実技試験を課していないのであるから当然のことである。

しかし、この歴然たる格差をわずかでも縮めたい。初心者達が最初の時点において、早くも学習に対する意欲を失ってしまわないように、ピアノ学習に関しての社会性の安定を図るようにとの思いから、初年度のうちに出来る限りレベルアップを計ることにした。3年次に教育実習が控えていることもあり、ともかくも2年間のピアノ実技(必修)を通じて初心者達を保育の現場に立てるようにならなければならないのである。

しかし、保育の現場において必要とされるピアノ演奏というものは、たえず幼児の状態を観察しながら、「弾き歌い」は勿論のこと、さらには幼児に対して「ことばかけ」を行ないながら

演奏しなければならないものである。楽譜や自分の両手を見ながらピアノを弾くために精神を集中し続けることなど絶対に許されないという、大変にきびしいものである。このように、たえず幼児の行動や状況に対応してピアノを弾かなければならぬだけでなく、さらにまだその上、音楽による豊かな情感の表現力や、幼児の身体活動の一つであるリズムによる自由表現においては、それぞれの場面や動きの変化に応じて隨時に効果音を作り出したり即興演奏をおこなうことの出来る、高度な音楽的能力をまた必要とされる。なぜならば、適当にしてかつ音楽的な音の効果によりその場に合った雰囲気を作り出し、幼児を空想の世界に充分ひたらせるこによって、幼児達のリズムの動きや身体表現を自然にかつスムーズにひっぱりだせることが出来るのであるから、このように高度な音楽的能力というものは保育の現場には無くてはならないものなのである。

これだけの高度な音楽的能力を、（ピアノの心得がある者ですらそうたやすくは得ることの出来ない高度な音楽的能力を）ピアノの手ほどきから始めてわずか2ヶ年の授業の中で行い、初心者をここまで養成するということは、ほとんど不可能なことであるともいえる。しかしながら、我が国のさまざまな意味における現体制の中に於いては、大学はこの難問題を出来るかぎりクリアーしていかなければならないし、またそれを果たす役割を担った保育者養成機関のひとつとして位置付けされているのである。

この難問題を出来るかぎり解決に近づけるためには、先程も述べたように、初心者に対して、初年度のうちに出来る限りレベルアップを図ることしかない。それはまた、一つには技術習得の上において、学習の勢いというものが必要とされるからでもある。そのため、初心者第1年次の習得目標を、初級の終わり若しくは中級の初めにまで引上げることに置いた。より具体的には、Beyerの終了と、1月の実技試験には Burgmüller 25番練習曲の No.25 程度（初級4）以上を目標とし、学習の勢いのめざましい者は Sonatinen アルバムの上級程度（中級1—3）にまで進めることにした。——参考のため、初心者の学生に対して一般的に行われている実技試験のレベルを見てみると、第1年次においては Beyer の No.60～No.100 程度（初級1）が試験曲とされており、Burgmüller 25番の曲集は第2年次において No.12～No.20 程度（初級3）が試験曲とされているのが実状であるようだ。——つまり本学においては、一般的な初心者の進度に比べて2～3倍以上の進度で進めようとする試みであるといえよう。

(2) 指導のねらい

これらの実践によって急速に進歩を示す初心者たち——きわめておそらく始め、まだピアノをさわり始めて数ヶ月にしかならないのに、またたく間に自分達が何年もかかって到達したレベルにまで迫ってくる初心者たち——の存在は、ピアノ経験者にしてみれば、大いなる脅威と感じるであろう。また同時に、賛嘆に値する存在となり、敬意を抱く者さえ出てきている。この様な環境に置かれては、誇り高き先学者たちも迂闊にはできない。「幼稚園教諭のピアノぐらいいは………」といったような、安閑とした余裕ある学習姿勢を保ち続けることは、ともすれば困難にもなる。したがって、中級程度のレベルの者であっても、止む無くより上級へと追いやられてしまうのである。（もっとも、不動のつわものも立派に存在している。）

一方、本学に於いて自由曲は、あくまでも本人の意思に拠る自主選択を尊重することを前提としているので、学生は自分の好みに応じた曲を学習する事ができる。「好きこそ物の……」のことわざどうり、殊に音楽に接する場合、気が乗らないまま義務感で学習を行なえば、その習得能率は明らかに悪くなるものである。したがって学習者に、達成目標に対する愛着心を抱かせる事が、何よりも大きな収穫をもたらすための手段であり、極めて大切な要素であると考える。

ただし、この場合に於ける一つの問題点は、学生が多くの曲を知らないために自主性に任せられない事が起こって来るが、その時は指導者がその学習者の性格に合いそうな曲（例えば雰囲気の柔らかい曲やダイナミックな曲など）を数曲聞かせた後に選択させる事によって、学習意欲を持たせる様にしている。また、もう一つの問題点は、実例は少ないが、極端に実力以上の曲を望んだ場合である。これに対しては、曲の変更をさせる事もあるが、大抵はその意欲を尊重して、少し Tempo をおそくしてでも、将来に完成させる楽しみを持たせながら学習に臨ませる事にしている。もっともこの場合、学習効率が悪くなる場合が多いが、学習者の意欲の尊重と、その曲の持つ高い音楽的要素に少しでも接する機会を持たせる事に目的を置いて、敢えて本人の自発的な学習姿勢を期待するものである。

以上に述べた指導のねらいを、項目として次に示す。

1. 初心者の急速なレベルの向上を図る。
2. 1の影響による経験者の追上げ。
3. 自主選曲による自発的な学習姿勢の喚起。

このねらいの上に立って行なった実践の結果、初級者の中級への移行、および中級者の上級への移行が数多く現れるようになり、その増加の実態は、表3～6、表8ならびに付表1を見ればいずれの数値の上にも明らかに認めることができる。

第二章 初心者および第1年次初級者が演奏した曲のグレードの推移とその考察

本章においては、大学入学後に初めてピアノ学習を行なったすべての学生（初心者）に対してのみ行った指導実践の結果報告を、その本来の目的とする。しかしながら、入学時に実施したピアノ学習経験年数についてのアンケート結果の記録は、表1で示したように、この10年間のうち、'79年度および'84～'87年度の入学者についてはすべて残されているものの、'77年度入学生の大部分の記録が残っている以外、他の年度については残念ながら一部しか残されていない。そのためそれらの年度の初心者については、別表1に見るよう、第1学年末の実技試験において初級曲を演奏した学生の受験曲のグレードおよびstepをすべて明らかにする中において、あわせて初心者と判明している者の一部に対する実践結果報告をも行なうこととする。また同時に、それ以前のレベルと比較対照するために、記録が残されていた'76～'77年入学の初級者の2年次および3年次における受験曲をも示しておく。さらにまた、2年次あるいは3年次までの2年～2年半の間にかけて、どれだけグレードを進み得たかを見るために、あわせてその記録をも示しておく。前節でも示したように、本学に於いて、ピアノ実技は2年間の必

修科目であるが、3年次は選択した者のみの報告となるため、受講者数は $\frac{1}{2} \sim \frac{1}{3}$ と少なくなる。

なお、第1年次の受講のみでその後進路変更した者についても、そのレベルを示すため、除くことなく報告しておく。なお、別表1の中で*印のある者は初心者と判明しているものである。また、幼児期（ここでは小学1年生までとする）に1年程度、あるいはその後高校入学までに半年程度の学習経験しか持たない一時的な経験者には、初心者に準じる者として、それぞれAおよびBと表示しておいた。

(1) 第1年次の初級曲による受験者数の減少とそのグレードの推移

まず始めに、実技試験曲のグレードの推移を、表3ならびにそのパーセンテージをグラフ化した図1を見るところにする。

表3 受験曲のグレード別推移 ('76～'87入学者)

入学年	76	77	78			79		80		81		82		83		84		85		86		87	
学年	3	2	3	1	2	3	1	2	1	2	1	2	1	2	1	2	1	2	1	2	1		
初級計	9	10	3	26	13	3	20	10	16	4	12	5	6	5	14	3	8	3	14	5	4	0	4
%	36	26	23	53	33	17	36	20	33	12	39	17	13	3	27	8	15	6	26	12	9	0	8
中級計	10	25	8	17	20	10	32	30	26	27	11	13	28	22	28	22	33	26	30	26	24	23	32
%	40	64	62	35	50	56	58	61	54	66	35	43	62	55	55	55	62	53	56	53	56	59	65
上級計	6	4	2	6	7	5	3	9	6	10	8	12	11	13	9	15	12	20	10	12	15	16	13
%	24	10	15	12	18	28	6	18	13	24	26	40	24	33	18	38	23	41	19	27	34	41	27
受講数	25	39	13	49	40	18	55	49	48	41	31	30	45	40	51	40	53	49	54	43	43	39	49

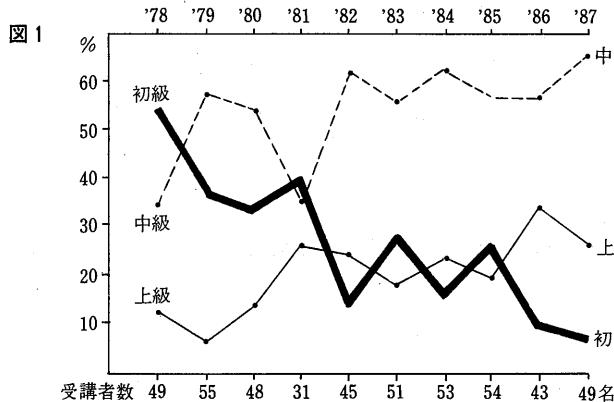


図1を一見しただけで、初級者の急激な減少は明白である。すなわち、第1年次における初級者数は、'78年度には26名・53%にも及んでいるが、翌'79年～'81年の3年間では30%台に減少している。この数値は、それ以前と比較するならば、'76年度第3年次（但し受講者数は'79年～'81年度第1年次の数と比べて44%～77%と少ないが）および'78年度第2年次（受講者数は'81年度第1年次の129%）のパーセンテージとほぼ近似している。すなわちこの時期には、初心者数の上で見る限り、それまでの第3年次または第2年次のレベルにまで、すでに第1年次の内においてほぼ到達しているものと思われる。さらにその翌年より本年度に至る'82年～'87年度の6年間について見るならば、一時'83年度と'85年度に20%台を示すものはあるが、15%～6%へと明らかに減少を示している。しかもこれは第1年次において見せた結果である。つま

り最近の入学者は、かつては2年半もの学習の積重ねによって到達し得たレベルを、多くの初級者は最初の1年間の学習のみで、大きく上回るに至ったという状況を明らかに示していると言えよう（'83年と'85年の両年度についての問題点は、後の考察において触ることにする）。

とりわけ初心者（＊印）に限って見れば、最初の1年間のみの学習で中級グレードへと急速に到達し得た事例も、初心者数がすべて判明している'84～'87年入学者の中では、18名中7名（39%）が見られる。その内訳は、'84年度には3名中1名、'85年度には7名中1名、'86年度には3名中3名の全員、'87年度には5名中2名となっている。

さらに、初心者に準じる一時的経験者（AおよびB）をも加えると、23名中12名（52%）にもなり、従来の一般的概念から見れば、驚異的とも思われる進歩の結果を見せている。このように初心者が、最初の1年間の内に中級にまで至るという、急速な進歩を見せ始めたのは、'80年以後の事（別表1'80年度No.17および'83年度No.15の学生）であり、それ以前にはこのような事例は見る事が出来なかつたものである。

古いアンケート結果の散逸によって'83年以前の初心者判別が不十分であるにもかかわらず、この判定に至らしむには少なからず疑問を抱かせるものではある。しかし当時指導に携わった者の一人として、またその中心者として、そのような際立った進歩を見せた学生の存在は記憶にはない。また、そのような事例があったとすれば、学生同士の間にあっても、注目に値する存在として浮かび上っていたはずである。事実、'78年の初心者の一人である学生は（別表1 No.16の学生）初級4の曲による受験ではあったが、その程度の達成度ではあっても、当時では他の学生達にとっての驚異的存在であり敬意をもって見られてもいた。また、この学生が示した成長力は、いくつかの面にさまざまな推進力となって、それ以後のグレードが徐々に引上げられる方向へと動き出した最初の要因になったものと思われる。本研究の初年度を'78年とした一つの理由はここにある。

（2）初級者数とその経験年数との間における相関関係

前項に於いて、この10年間における初級者数の明らかな減少を示したが、ここに一つの疑問が起こってくる。それは、最近の入学者の経験年数およびピアノレベルが、この10年間にそれだけ上昇しているのではないだろうかという疑問である。それゆえ次にその相関関係を調べてみることにする。

表4 初心者および初級者数と経験年数との相関

	0年	A&B	%	～3年	0～3年	0～6年	初心初級	1年次初級者	2年次初級者
'84	3名	3名	11	4名	8%	10名	19%	28名	53%
'85	7名	4名	22	6名	11%	17名	32%	47名	60%
'86	3名	1名	10	1名	2%	5名	12%	15名	35%
'87	5名	0名	10	5名	10%	10名	20%	15名	30%
'77	1名	2名	11	2名	5%	5名	16%	13名	41%
'79	5名	0名	9	4名	7%	9名	16%	21名	38%

注)「初心初級」の中には、初心者のうち1年次に中級へ進んだ者をも含んでいる。

2年次の括弧内は、1年次初心者のうち進路変更者数を示す。

'77年度は2年次のみであり、全受講者のうち82%のデーターである。

～3年は未経験者（初心者）とA&Bを除いた残りの者。

表4により、経験年数の判明している年度について経年変化を見ると、まず初心者（未経験者・表中0年で表示）数とその占有率の上に於いては、'85年度には7名とやや多いものの、8年前である79年度を含む他の年度の間にはそう大きな違いは見られない。（もっとも10年前の'77年度では1名と目立って少ない数字ではあるが、18%・7名の調査漏れがあるため、またその受験曲のstep数からみて初心者数が増加する可能性は少ないものの数名の増加がないとは言えないため、今はあえて対象から除いておくことにする。）さらに、初心者に準ずる者（AおよびB）を加えたその比率の上に於いては、'85年度に一層の増加（他の2倍）を見せるものの、それを除けばやはり同じ傾向にある。次に対象をより拡大して学習経験0～6年までの経験の浅い者について見ると、ここでも'85年度のみ目立って多い他は、'84年度を除いて10年前ともそう大きな開きがあるとは言えない。あえて一步譲るならば、最近の2年間（'86・'87年度）については、経験の浅い者は以前に比べて少しは減っていると言える。しかし'84・'85年度について見れば、逆にはっきりと増加を示しているのである。

これに対して、全体レベルの上昇を意味する1年次初級者（初級曲による受験者）数の減少は、未経験者（初心者）および3年以内の経験者数が目立って多い'85年度の26%を除くと、36%にもおよぶ初級者をもつ8年前の'79年度に比べて、'84年度以降は約半分以下へと明確に減少している。さらにまたこの'84～'87年度では、1年次初級者の比率が0～3年の未経験者および経験者の比率とほぼ対応しながらも下まわっている。これに対して'79年度では、0～6年のより長期の経験者を含めた比率（38%）の方がほとんど等しい数値で対応し、0～3年の16%から見れば、最近の傾向とは逆に、倍以上も上まわっている。すなわち、最近（'84～'87年度）の1年次初級者の方がより初步の者によって構成され、しかも全体の中に占める人数の比率の上においても、減少を果たしているということになる。更にまた、2年次における初級者の減少については、もはや敢えて比較するまでもない。

ここに至ってそれぞれの相関関係は、'85年度に見るように全く無いとは言えないが、入学後1年の間にはかなり稀薄になっていると言えよう。本来常識的には、表2で見たように、相関関係は密接な形となって現れるはずであるが、その影響力を超える推進力として、学習者の発する「意欲」というエネルギーの存在を、もはや否定することはできないであろう。

（3）初心者および第1年次初級曲演奏者の、第2年次中級到達度推移

表5は、'78～'86年にかけての9年間にわたる入学者のうち、第1年次に初級の曲で受験した者が第2年次の試験にはその中からどれだけの者が中級に進んだかを示したものである。

まず初めに、この9年間にかけて第2年次での中級到達者がいかに増加したかは、d) 中級到達率の上に明確に表れている。すなわち、'78～'79年には38%～44%であったものが、それ以後は58%～75%となり、（'82年のみ極端に低下）'86年には全員が中級に到達した事を示している。つまり、'86年度生（披験者8名）においては、第1年次の時点ですべてに中級に到達したすべての初心者4名（A1名を含む）と有経験の初級者4名の全員が、中級に到達し得たという事になるのである。

さらにまた初心者のみに見る中級到達率の上でも、その上の段を見ると明確に100%への増

表5 初心者および第1年度初級曲演奏者のうち中級到達者数とその比率

		'78	'79	'80	'81	'82	'83	'84	'85	'86
第1年次	a) 初級・初心者数	26/1	20/5	17/4	12/1	6/1	15/6	10/6	18/11	8/4
	初心者中級到達数	0	0	1	0	0	1	2	4	4
	初心者中級到達率	0%	0%	25%	0%	0%	16%	33%	36%	100%
第2年次	b) aの継続受講者	21/1	16/5	13/3	12/1	6/1	12/5	9/6	14/10	8/4
	c) bの中級到達者数とそのうちの初心者占有率	8/1	7/0	9/2	7/0	1/0	9/3	6/3	9/5	8/4
		13%	0%	22%	0%	17%	33%	50%	56%	100%
	d) 中級到達率 c/b	38%	44%	69%	58%	17%	75%	67%	64%	100%
	第1学年受講者総数とaの同学年内占有率	49名	55名	48名	31名	45名	51名	53名	54名	43名
		53%	36%	35%	39%	13%	29%	19%	33%	19%
	第2学年受講者総数とbの同学年内占有率	40名	49名	41名	30名	40名	40名	49名	43名	39名
		53%	33%	32%	40%	15%	30%	18%	33%	21%

注) ここでの初心者には、A.B(一時的経験者)を含む。

判明している初心者の数を、a.b.cのそれぞれ右側に、内数として示した。

下線のある年度は、初心者の数がすべて判明している年度である。

加を示している。初心者数の把握不十分による数字の欠落した年度があるため、9年間の明確な動向として判定を下す事には若干の抵抗もあるが、初心者数および経験年数のすべて判明している'79年の0% (初心者5名のうち中級に到達した者なし)から見ても、その差は余りにも大きすぎると言わざるを得ない。

念のため初心・初級の披験者数を比較しておくと、'85年のみ第1年次aで他の年度のほぼ2倍 (第2年次bでも同じ) を示す他は、特に大きな差は見られない。'85年についても、初心・初級の者が多い中では、ともすれば社会的安定感から、進歩への努力が乏しくなることが大いに予想されうるが、にもかかわらず、dの第2年次中級到達率こそ前年比-3%と僅かに下がるもの、'78年度以降の流れの上から見れば、明らかに中級到達率漸増の途中であると言える。また、初心・初級者の同学年内占有率の上から見ても、'85年のそれは'79年および'80年とほぼ等しい (2年次では同率)。にもかかわらず、中級到達率の大きな相違を1・2年次ともに示しているのである。

一方、初心者を除いた残り、有経験の1年次初級者のうち、2年次末になっても中級に進めなかった者の数の推移 (表6) を見ても、大きく減少してきているのを見ることができる。

次に、有経験初級者のうち2年次になってから中級に進み得た者について、どれだけのstep上昇によってその中級受験曲レベルへ到達し得たかを、その数の上で見てみる。(表7および別表1より抽出)

9年間の合計数に明らかなように、有経験初級者のうち2年次になってから、+3までの進歩によって中級にすすみ得た者が6割近くを占めている (64%)。

これに対して、入学後より学習を始めた初心者が、1年次・2年次の終わりまでに、どれだけ進み得たかを、同じくstepの上から見ることにする。(表8)

注) 初級1～上級5を15段階区分により表示した。すなわち、step5=初級5、step6=中級1、step11=上級1のことである。

表6 有経験初級者数 J
初級残留者数 S

2年	S	J	%
'78	13	25	65
'79	4	11	36
'80	3	13	23
'81	5	8	63
'82	4	5	80
'83	1	6	17
'84	0	3	0
'85	1	5	20
'86	0	1	0

表7 2年次中級到達者の進度

進度	+2	+3	+4	+5	+9
'78	1	3	1		1
'79	2	2	1	1	
'80		5			
'81	2	1	1	1	
'82					
'83	2	2		1	
'84			1	2	
'85	2		1		
'86	2	1		1	
合計	11	13	6	6	1

(初心者を除く)

表8 初心者の step 別進度一覧表

step	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14
第1年	'78				1									
	'79	1	1	2	1									
	'80			1	2	1								
	'81	1	1	2										
	'82	1												
	'83	1	3	2							1			
次年	'84		1	2	1	1	1							
	'85	1	1	3	2									
	'86					2	1	1						
	合計	3	5	12	11	4	2	1			1			
step	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14
第2年	'78				1									
	'79		2	2		1								
	'80			1		1		1						
	'81			1		2	1							
	'82	1												
	'83		2			2	2	1			1			
次年	'84		2		1	1	1	1	1	1				
	'85	2				2		2						
	'86						1	2	1	1				
	合計	0	1	6	6	2	6	6	5	1	1			1

表8で見るように、初心者として初めてピアノを学び始めた者であっても、わずか1・2年後にはこれだけ多くの者が中級へ到達できているのである。しかも、先程も見たように、最近になるほど中級のグレードに上がる者が増えてきている。(但し'83年度の上級に至った者は、ポピュラー曲の独習による実質的には経験者である。)この9年間の合計で見る限り、1年次における平均的なstep数は3～4であり、('86年度だけは5以下なし)、2年次における平均的なstep数は3～4と6～8の2極分化を示している。(同じく'86年度だけは6以下なし)しかし、前半'78～'82年の5年間にこれを見ると、1年次ではほぼ変わりはないものの(但し最高レベルのstep6は1名しか見られない)、2年次ではstep3～4と6～8の2極となり7以上は1名に止まっている。これに対して後半の2年次平均は、中級の方の極ではstep7～8へと上昇、しか�数の上でも増加している(step6は中間レベルとなり、それも'84年度にわずか1名があるのみ)。また'86年度では中級2であるstep7が初心者の最低レベルに引上げられるまでに至っている。

これをもし有経験初級者と同じく1年間のstep上昇数を見るならば(初めてピアノを学ぶ者として、当然step0からのスタートとして考えるならば)、1年次の平均step数3～4は+3～+4であり、2年次の平均3～4と6～8はそれぞれ、+3～+4と+6～+8となる。もっとも2年次の数は2年間にかけての進度なので単純に置換することはできないが、それでも合計5名もあるstep8の者は、第2節において触れた一般的なレベルから見ても、大変な勢いでの進歩を遂げたと言わざるを得ないであろう。

先程も見た有経験者であって2年次になっても未だ初級に残留している者の存在と比べるまでもないが、初心者の発揮する学習の勢いというものが、新鮮でいかに勝れたものであるかがこの実態を見れば明白である。それゆえに指導者は、初心者の中に潜んでいるこの限りない力を、いかに無理なく発揮させ得るかに十分意を尽くさなければならない。

次章においては、この初心者のうちで、特に目覚ましい飛躍的進歩を遂げた'86年度の学生について、その成長の経過をたどってみることにする。

別表1 初心者初級者による受験曲の個人別 Step の推移 ('78~'87年度入学生)

'78	1年	2年土	3年土	'79	1年	2年土	* 4	st 3	4 + 1	'82	1年	2年土	'84	1年	2年土	12	st 4	8 + 4
No. 1	st 1	2 + 1		No. 1	st 1	3 + 2	5	3	6 + 3	* 1	st 2	2 0	A 1	st 2	3 + 1	13	5	
2	1	2 + 1			2	1	6	3	5 + 2	2	4 4	0	2	2	7 + 5	14	5	7 + 2
3	1	3 + 2	6 + 3	* 3	1	3 + 2	7	3	6 + 3	3	4 4	0	* 3	3	6 + 3	* 15	6	3 - 3
4	1	3 + 2	4 + 1		4	1 6 + 5	8	3		4	4 3 - 1		4	3	7 + 4	A 16	6	7 + 1
5	1	2 + 1			5	1	9	4	5 + 1	5	5 5	0	A 5	3 3	0	B 17	8	
6	1			* 6	2	4 + 2	* 10	4	6 + 2	6	5 6 + 1		* 6	4 5 + 1		A 18	8	8 0
7	1	3 + 2		* 7	2	3 + 1	* 11	4	8 + 4	'83	1年	2年土	7	4	9 + 5	'86	1年	2年土
8	1	3 + 2	4 + 1		8	3	12	4	7 + 3				8	5		No. 1	st 2	7 + 5
9	2	3 + 1		* 9	3	4 + 1	13	4	7 + 3	* 1	st 1		A 9	6	8 + 2	2	4	7 + 3
10	2			* 10	3	4 + 1	14	5	6 + 1	2	2 3 + 1		* 10	7	9 + 2	3	4	6 + 2
11	3	4 + 1			11	3 6 + 3	15	5	3 - 2	* 3	3 4 + 1		'85	1年	2年土	4	4	6 + 2
12	3	4 + 1			12	3 3 0	16	5	8 + 3	* 4	3 4 + 1					A 5	6	7 + 1
13	3	6 + 3	4 - 2		13	4 6 + 2	* 17	6		5	3 8 + 5		* 1	st 1	5 + 4	* 6	6	10 + 4
14	3	6 + 3			14	4 6 + 2	'81	1年	2年土	6	4		* 2	2 3 + 1	* 7	7	8 + 1	
15	4	5 + 1	6 + 1		15	4 5 + 1	No. 1	st 2	6 + 4	7	4		3	3		* 8	8	8 0
* 16	4	6 + 2	8 + 2		16	4 8 + 4		3	4 + 1	8	4 6 + 2		* 4	3 3 0		'87	1年	2年土
17	4				17	5 6 + 1		3	4 + 1	9	4 6 + 2		* 5	3 3 0				
18	4	8 + 4	7 - 1		18	5 5 0		4	3 7 + 4	* 10	4 7 + 3	6	3	7 + 4	* 1	st 2		
19	4	4 0			19	5 9 + 4		5	3 8 + 5	* 11	4 7 + 3	A 7	3	7 + 4	* 2	2		
20	4	13 + 9	7 - 4		20	5		6	4 4 0	12	4 9 + 5	8	4		* 3	4		
21	4	7 + 3			'80	1年	2年土	7	4 6 + 2	13	4 7 + 3	* 9	4 6 + 2		4	4		
22	5				No. 1	st 1		8	4 7 + 3	14	5 9 + 4	* 10	4 6 + 2		* 5	6		
23	5	6 + 1			2	1 3 + 2		9	4 7 + 3	* 15	11 14 + 3	11	4 7 + 3		* 6	6		
24	5							10	4 4 0									
25	5	5 0						11	4 6 + 2									
26	5	7 + 2						* 12	5 5 0									

*印は初心者

初級 step 1 ~ 5

中級 step 6 ~ 10

上級 step 11 ~ 15

表中 step 数値に下線を入れたものは、私見による判別である。

+2などの表示は、2 step の進歩を示す。

原稿受理 1987年11月30日